

日本の決済ネットワークの大動脈である

「金銀システム」を運営する「全国銀行資

金決済ネットワーク」が決済サービスの高

度化を話し合う有識者会議を13日に都内で

開いた。唯一の学術メーンバとして招かれ

たが麗沢大学の中島真志教授（金融論）

だ。「日本の銀行は金融とITが融合する

フィンテックに対する態度が鈍い。もっと

危機感を持つべきだ」と話す。

有識者会議では、欧米で広がっているモ

バイルペイメント（利用者が携帯番号を使

って相手の銀行口座に送金する小口決済サ

ービス）の導入を提言した。2014年に

サービスが始まった英国の「Paym」は

330万人の利用者があり、利用件数は年

率5割超の勢いで伸びている。現金利用の

少ないスマホエ

ブでも12年に

「スクイッシュ」

というサービス

が登場し、既に

国民の2人に1人が利用している。

「日本でも同様のサービスを銀行が率先

して導入すれば、フィンテックで銀行が中

抜き』されて決済の主役から引きずり下ろ

されることもない」

「決済」に目覚めたのは前戦の日本銀行

時代に遡る。1990年前後に日銀金融研

究所で決済を研究。金融情報システムセン

ター（FISC）、国際決済銀行（BIS）

への出回で知見をさらに探め、欧米の「決

済革命」を目の当たりにした。「フィンテ

ックが登場し、全てを追い続けられなくな

ら、研究ネタには困らない」と笑う。

消費者目線でサービスを日進月歩で進化

させる欧米と、モハールの可能性に気づか

ない日本の差に危機感を抱く。「このまま

だと先進国で日本は取り残される」。会議

を通じて、金銀システムの経営陣の意識を変

えたいと意気込んでいる。（木ノ内敏久）



麗沢大学
中島真志教授

「スクイッシュ」
というサービス
が登場し、既に